

Title	存在論の根本問題序説(其の一)
Sub Title	Die Einleitung fur das Grundproblem der Ontologie
Author	立野, 清隆(Tateno, Kiyotaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.35 (1958. 11) ,p.141- 162
JaLC DOI	
Abstract	Man kann die Grundeigentumlichkeit der europäischen Philosophie im intellektuellen Essentialismus befinden. Es vollendet sich im allgemeinen beim Aristotelischen-Thomismus. Das Aristotelischen-Thomismus (die scholastische Ontologie), das die Identität zwischen das Denken, Seiendes und Wesen, und das Identitäts-Widerspruchsprinzip als das höchste ontologische Grundprinzip betrachtet, erfahrend die Gewissheit des Seins des denkenden Ich, d. i. das neuzeitlichen subjektiven Selbstbewusstsein, wendet es sich hierauf in die Metaphysik des subjektiven Willens, welche in der Hegelsphilosophie des absoluten Geistes und Nietzsches-Philosophie des Willens zur Macht zu Ende kommt. In diesem geschichtlichen Entwicklungs-Prozesse vom intellektuellen Essentialismus zur Metaphysik des subjektiven Willens kann man gewiss das Wesen der europäischen Metaphysik begreifen. Aber das intellektuellen Essentialismus, das Identitäts-Widerspruchsprinzip für das höchste ontologische Grundprinzip haltet, ist nur noch eine analytische Erklärung der erscheinenden Welt oder eine reflektierende verständliche Auslegung, der mit der unmittelbaren Bejahung des Anwesen der wirklichen Welt beginnt und endet. Deshalb gehörte es durchaus nicht zur Sache, die existierende Möglichkeit des Anwesen der wirklichen Welt zu fragen; die existierende Welt und die in der Welt anwesende Seiende in den absoluten anfanglichen Woraus und den schöpferischen zukünftigen Wozu sich selbst aufbrechend zu fragen. Ich wollte die innere Geschichte darstellen, in der sich die Ausbildung und die Zerstörung der Herrschaft des Denkens als ratio der Logik über das Sein des Seienden vollzog.
Notes	I 哲学,慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000035-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

存在論の根本問題序説（其の一）

立野清隆

幾世紀以来讚美され来った理性が、思索に対する最も頑強な敵手であるということ
我々が経験した時にこそ、始めて思索が始まる。——ハイデガー（「森の小径」二四七頁）。

1

曾つてはヨーロッパ人にとって植民地の拡大を企画し世界にヨーロッパ文化を普及し、その文明を移植することに大きな歴史的意味があったし、又後進諸民族諸国家が、競って此の高度に発達したヨーロッパ文化（就中物質文明）の摂取消化とそれへの参与とに、民族の叡智を傾けることに充分な意義を見出し得たのであるが、今日果してそのことにどれほどの意味があるであろうか。同様に又古代ギリシアに発し、中世キリスト教の護教哲学として再解釈されることによつて根着き、近代資本主義社会の下に主体的意志の形而上学として発展して来たヨーロッパ哲学を、今日我々が之をその儘自らの精神的中核として受け継ぎ、延いては人類の普遍的共有を目指し

て普及せしめることに、果してどれほどの意味と価値とを見出すことが出来るのであろうか。ヨーロッパ哲学とは何ぞや？ 我々は二千数百年に亘って伝承され来つて未だ曾つて一度も明らさまに、その現実的な存立そのことに関して疑われたことのない哲学^{ピロソフ}することそのことを、神聖なる絶対的事実として權威的に受取る前に、敢えてその現実的な可能性の根拠と、従つて又ヨーロッパ哲学の根本の本質とを検討しなければならぬ歴史的阶段に立ち至っているのではないかと思われる。ヨーロッパ哲学は自らの現実的な存立そのことの正当性を、何によつて保証し得るとするのであろうか。それとも又我々は今日尚ほ、知の為の知、真理の為の真理の追求といふ自己目的的にして無制約的な理性の必然的な欲求の最も純粋な現実的形態として哲学を、諸他一切の科学的探究の根源に横わる絶対的事実としてその正当性を前提的に確信し得るが故に、哲学の現実的存立そのことに関する如何なる疑問からも免れ得ているとでも云い得るのであろうか。然しかかる懷疑を通して少くとも我々はヨーロッパ哲学を、広く一般に人間的な思索行為の一形態として見返し捉え直すことの出来る、真に普遍的な思索一般の立場に到達することが出来るものと考え、之に対して或は更に、ヨーロッパ哲学は凡そ人間的理性に可能な限りの一切の思索形態を含むものとして、それ自身最も包括的な人間的思索そのものではないのかという疑問が生ずるかも知れない。然し果してそうであらうか。二千数百年のヨーロッパ哲学の歴史を以てしても尚ほ且つ、未だ一度も顧慮されたことのない特異な、然も極めて根源的な思索の道も亦あり得るのではあるまいか？ ヨーロッパ哲学の全歴史の現実的な存立そのことを可能的なるものとしてその正当性を問うかかる立場は、ヨーロッパ哲学の歴史的全体をあり来つたその歴史的成果に関して之をその儘肯定是認し、且つ之に依存し、単にその本質的諸様相を所謂学説史的に探究することを以て足れりとする内在的立場を遙に超えて、人間的思索行

為そのものを云わば実存可能的に——ハイデガー流に語るならば存在史的に——探究する立場であるということ
が出来るであろう。以下序説的に試みようとする此の論述は、自らヨーロッパ的思索圏域の只中に於いて思索し
つつ、敢えてそこからの超出を企図するかかる実存論的思索の立場そのものを、簡単な哲学史を媒介することに
よって概観的に明示し、かくてそれに続く特殊な哲学史的研究の為の先行的嚮導理念たらしめようとするにある。

2

ギリシア黎明期以来哲学は存在論として出発した。存在論とは存在するものを存在するものとしてその至純な
る存在一般に関して之を義証し、基礎付けることを目指すものとして、それは存在するもの全体の究極的な存在
根拠の探究の学であるということが出来るであろう。

然るに又ギリシア人が存在するものと語る時、それは常に、「存在するであろうもの」、「既に存在したもの」
と区別せられて、「現在の存在しているもの」を意味している。即ちそれは「未だ……ない」という暗く蔽わ
れた未来から熟し来って現前し、再び「既に……ない」という堅く閉ざされた過去の中へと消え去ってゆくその
限りに於いてのみ止まっているものである。現在しているものは到来と退去との間に移行的に滞在している。それ
は未だ到来のうちに在り乍ら然も既に退去のうちに在る。かくの如く、存在しているものはそれが常に時間的境
域に於いて現在している限り、時間的制約を免れ得ず、存在しているものはその現在そのことに関して常に有
限的であり、存在することが最早や絶対に不可能となる可能性、即ち偶然性によって不断に規定せられていると

いうことが出来る。即ち存在するものの存在はその都度常にその非存在・無によって根拠づけられ、不断の無化消滅への可能性によって制約されていると云えよう。それ故存在するものを全体的に問い、存在するものをその存在すること一般に関して探究することは、当然存在するものをその存在しないこと、即ち「未だ存在しない」ことと「最早や存在しない」こととの関連に於いて問題にするものであるといふべく、かくて存在論は、結局存在するものの全体を生成との対比に於いて生成発展的な動的過程から捉えることとして実際に遂行せられることとなったのである。

存在するものの全体を生成的發展過程から捉えるといふことは、もともと存在するものの現在そのことを、現在しないこととの相即的關係に於いて問題とすることであり、かくてそれは又必然的に、存在するものの全体を生成的發展過程からと同時に、衰滅的腐朽過程からも問題にすることであり、全く相矛盾する之等両過程のうちその何れを以て主導的本質的なものとなし、従つて又その何れを以て媒介的副次的なものと看做すべきかは俄に断定し難く、それ自身改めて主題的に検討されなければならない存在論的根本課題であると云はなければならぬ。然るに存在するものの存在を、その至純なる存在一般に関して問題としようとする人間の実存そのものも亦、それ自身時間的境域に在つて有限的に現在するものとして、当座的に滞在すべく当てがわれた自らの現在そのことの持続的な固執と、その恒常不変的な存続とに関心するものである限り、存在するものを現在するものとしてその都度発現生起せしめると共に之を保持存続せしめる、生成的發展過程及びその視圈に主導的地位を与え、衰滅的腐朽過程及びその視圈は単に生成的發展活動そのものから派生され又遺棄されて来る殘滓的なものと看做すか、或は精々生成的發展活動に対して消極的に之に奉仕し、その為の単なる手段又は媒介的なものとして

之に従属せしめ、かくすることによって、それが生成的發展活動そのものを可能ならしめる存在根拠であるといふ、積極的の意味を隠蔽しようとする自然的性向に支配されて、存在論は既にその出発点に於いて、一つの独断的偏向（主知主義的エッセンチアリズム）に陥入るべき根本的性格を担っていたということが出来る。

衰滅的腐朽過程を単に生成的發展活動にとって必要な条件的なるもの、又後者から派生される副次的なるもの、存在するもの全体にとって何としても本来的たり得ない否定的なるものという、第二義的な地位に押しやると共に、全く逆に生成的發展過程を無限に前者を否定し去ってゆくものとして殆んど無制約的なまでに肯定は認し、かかる視圈から存在するもの全体をその存在に関して取り集め把握する時、それは既に目的論的合理主義の形而上学の形成として、哲学は此処に主知主義的エッセンチアリズムの体系的完成を目指して進展することとなる。我々は之をギリシア初期の自然哲学の根柢をなしていた永遠回帰的視圈からする運命的実存的な思索が、次第に後期プラトン哲学とアリストテレス哲学とに於いて始めて登場した目的論的な思索へと、席を譲り渡してゆく過程に於いて明らかに捉えることが出来るものと思う。

存在するもの全体（自然や精神をも含めて）は自らの存在そのことに関して義証され基礎付けられなければならなかった。何となれば存在するものは現在するものとして、それは常に時間的今一般の境域に於いてのみ現実的にその存在に関して保持されて居り、然もそれは「未だ……ない」未来からの到来と、「既に……ない」過去への退去との間の果無い束の間のものとして、それ自身移行的に、従って又根柢を失って滞在しているが故に、此処に存在するものの存在を確定し基礎付けることによって之を義証せんとする存在問題が、他の凡ゆる問題に立ち勝って存在論的意味を持たなければならぬ所以があった。即ち存在するもの全体は、何よりも先ずそれ

の非存在・無との區別に於いて、又非存在との対決によって確定され基礎付けられ、かくて義証されなければならなかったのである。存在するものの存在、即ち一切の存在するものがそこに於いて存在するものとして発現生起する存在一般の地平は、云うまでもなく過去・現在・未来を根本的諸契機とする時間である。存在しているものの全体の終局的な存在根拠を求める問いが最後に行きつく所は時間であり、時間の根本構造とそれの起始の問題こそ存在論の根本問題であるということが出来よう。然し此処に須臾も止ることなく生成発展するとともに衰滅腐朽する、相互絶対否定的な且つ存在構成的な時間の動的過程の全体を、其の儘之を永遠回帰的な根源的時間として把握することによって、一切の存在するものの窮極的な存在根拠と解するヘラクレイトスのな立場と、生成変化する時間活動の根柢に、更に自己同一的一者性を維持して恒常不変的に止まる何ものかを以て、始めて之を存在根拠と考えるエレア学派更にはプラトン、アリストテレスの立場とに相分れる。私は後者を以て前者からの転落と看做し、又存在するものを存在するものとしてその至純なる存在一般に関して基礎付け義証する哲学を指し乍ら、却って存在するものを現在するものとしてあり来った恒常不変的な本質の何であるかに関して之をその儘肯定是認し、只単にその恒常不変的な本質的諸様相の如何にあるかを一般的に問う科学（ギリシア的科學）を創始するに至った根本要因と解してゆきたいと思う。

ところで然し存在するものの全体を生成的發展過程の視圈に立つて捉えようとする時、眞実に存在するものウーシアは、凡ゆる変化の中にあつて恒常不変的な自己同一的一者性を維持して止まるものでなければならぬであらう。かくてアリストテレスは、過去—現在—未来へと亘って生起する生成的發展活動の目指す何かとしての「形相因」「目的因」を、かかる眞實在の根源的な構成要因として呈示する。両者は存在するものを存在するもの

として凡ゆる時間的变化の中に於いて、恒常不変的な自己同一の一者性に関して取り集め、存在するものを常住的な何ものかとして繋ぎ留め現在せしめるものとして、それは存在するもの全体の存在原因であると共に、かかる生成的变化の全過程がそれを目指して不断に進展し活動し、そこに於いてかかる生成的發展活動そのものが終結する最後の目標であることによつて、それは又同時にかかる生成的發展活動そのものを起始せしめる「運動因」でもあったのである。存在するもの全体の究極的な存在原因を、生成的發展過程の視圈に立つて考察する時、以上の如き形相因目的因運動因の三つがその根本的な構成諸契機として明らかにせられるであろう。然るに他方、此の様な目的因的形相因的に発現生起せしめられる存在者の素材となり質料となる何ものかも亦、常に何等かの形に於いて、即ち既在的に現在していなければならぬであろう。かくて此処に、未だ形相化せられてはいないが然し、必然的に形相化せられ目的的に統一せられ得る可能性によつて貫かれた、素材たる何ものかの恒常的な現在そのことの根拠としての質料因が、附随的な意味に於ける存在原因として挙示せられ得るであろう。即ち生成的發展過程の視圈に立つて考察する時、凡ゆる変化の中にあつて恒常不変的な自己同一の一者性を維持して現存する真実在^{ワシツク}は、かかる生成的發展活動の目指す何ものかとしての形相因、目的因、従つて又運動因をその根本的構成諸契機とするものであるであろう。之に対して質料的なるもの一切は、それが只現実的に形相化せられ、目的的に取り集めらるべき正^{まさ}しくその限りに於いてのみ始めて現存し得、従つて又不断に超克否定せらるべき限りに於いてのみ意味を有し得る何ものかとして、前三者に比する時偶然的可滅的なるもの、如何なる学の対象ともなり得ない存在の屑として斥けられるであろう。然るに若しも我々が観点を變えて、生成的發展過程とは全く逆に、衰滅的腐朽過程の視圈に立つて一切の存在するものを考察する時、そこに如何なる事態が生ずる

であろうか。今や凡ゆる衰滅的腐朽過程の中にあつて、恒常不變的な自己同一の一者性を維持して現在の止まる真実在は、衰滅腐朽そのことがそれへと目指して消滅し去つてゆく何ものかとしての質料的なるもの、最早や如何なる意味に於いても何ものかとして限定され形相化され得ない最終極的な意味に於ける質料的なるものと看做されなければならず、之に対して形相的なるもの一切は須臾も自己同一性を維持して止まり難い可滅的偶然的なるものと解されなければならないであろう。それ故若しも先に述べた様に、質料因を生成的發展過程の視圖から一方的に捉えようとするならば、そこには既に価値的に言つて、諸他の三原因とは比較すべくもない低次の意味が与えられ、質料因を質料因としてその独自の存在原因性に即して把握することが全く不可能となることも蓋し当然であると云わなければならない。質料は只質料的形相として可能態に於ける形相でしかなく、生成發展的な形相の自己實現活動に於ける単なる起点として要請されたるもの、或は又かかる活動に対して単にその素材を呈供するという仮設の意味を与えられているに過ぎず、質料の質料たる所以のものは、只自らを残る隅なく形相化せしめることによつて現実態に於ける形相たらしめ、かくて質料の持つ偶然的個体的な現実的性格、乃至は形相性一般に対するその絶対否定的な抵抗的性格を全く消滅し尽くすことにあるといふべく、形相によるかか一方的な被規定性を以て質料因の根本的性格と看做すならば、抑々質料因とは如何なる意味に於いても何等の自律性を有し得ず、従つてかかるものを以て独立的な存在原因と考えることは絶対に許されないであろう。アリストテレスによつて定礎され、中世スコラ哲学によつて継承發展せしめられ、爾後今日に至るまでのヨーロッパ伝統哲学の根本性格を形成する主知主義的エッセンチアリズムは、実に只かかる存在論的視圖からして始めて可能であつたのである。此の様な観点の下に我々は序説に引き続き本論に於いて、アリストテレス形而上学の根本

性格を、その存在論的自己決定の根源にまで溯ることによって詳細に論及するであろう。

扱て存在するものが存在するものとして、その唯一的にして代替性のない個体的実存性に関して決定づけられて発現生起し得る存在一般の地平は時間であり、然もそれは過去—現在—未来へと目指して連続的に継起する生成的發展活動（陽遁的時間乃至連続継起時間）と、之に対して言わば絶対否定的に、未来—現在—過去へと非連続的断絶的に還帰する衰滅的腐朽活動（陰遁的時間）との、交互転入媒介的な相補的全体としての永遠回帰的時間と解されなければならぬであろう。然るに若しも、かく存在するものを存在するものとしてその都度個体的実存的に発現生起せしめる根源的存在活動の両契機（生成的發展活動と衰滅的腐朽活動）のうち、その一方即ち生成的發展活動を主軸と解し、他方衰滅的腐朽活動を非本来的なるもの、只前者から派生され遺棄されて来るそれ自身否定的なるもの、前者の完全現実態的自己完成と共に忽ちにして滅び去るべき偶然的可滅的なるものと看做すならば、此処に存在一般の可能的地平は、過去—現在—未来へと亘って生成發展する連続的継起時間そのものとして確定せられるであろう。存在するものが存在するものとしてその存在することの何かに関して決定づけられつつ発現生起する存在一般の地平、それは過去—現在—未来を貫いて生成發展する今系列の継起的時間であり、時間こそ存在するものの全体を、その至純なる存在一般に関して之を具体的現実的に可能ならしめる最究極的な存在根拠であり、決定的な存在原因であるということとなるであろう。従って存在するもの全体の究極的存在原因の把握、即ち存在するものを存在するものとしてその至純なる存在一般に関して基礎付け義証するといふことは、結局存在一般としての時間を、然もそれが存在するものを存在するものとして可能ならしめる正しくその仕方に於いて、具体的現実的に把握することではなければならないであろう。然るに此の様な把握の試みもそ

れ自身時間的境域の内に於いて行われるものである限り、徹頭徹尾時間の内、に、囚われ、時間によって制約されて居り、従つて時間を存在するもの全体の窮極的存在原因として把握し得る為には、何よりも先ず自らがそこに置かれてある存在根拠たる時間そのものからの超出が試みられなければならないであろう。此処に時間を超えた何ものかとしての超時間的永遠的なるものが、存在するもの全体の存在根拠たる時間を更に可能ならしめる根拠の根拠として想定され、存在するもの全体の究極的な存在根拠の把握は、かくして想定された永遠的なるものへの超出として、常に之との相即性に於いて遂行されなければならなかつたのである。

然るに一方存在するもの全体の究極的存在根拠として呈示せられた今系列の継起的時間は、過去—現在—未来を貫いて恒常不変的な自己同一の一者性を維持して止まれる現在の今一般の可能的地平、現在性一般の地平そのものであり、それ故今系列の継起的時間を存在するもの全体の究極的存在根拠と看做して、それが存在するものをその存在すること一般に関して可能ならしめる仕方について明らかにするということとは、とりも直さず存在するものの現在そのことの絶対化であり、現在性一般の地平に於いて存在するもの全体を、そのあり来つて現在している姿・形の儘に於いて肯定是認することに他ならない。存在するものの存在が今系列の連続継起的時間そのものであるということは、結局存在するものが時間的境域に於いて現存しているということを肯定是認することとでしかなく、それ故存在するものをその存在すること一般に関して基礎付け義証し得んが為には、更に存在するものが存在するものとしてそこに於いて現在している、現在性一般としての時間そのものからの超出が遂行されなければならないであろう。然るに時間からの超出が、単に凡ゆる変化の中にあつて恒常不変的な自己同一的一者性を維持して止まれる何ものかという、無時間的基体的なるものを目指している限り、それは単に偶然的

可滅的なその都度の「現在の今」に対する、恒常不変的な「止まれる今」乃至「現在の今一般の地平」が意味されていくに過ぎず、それ自身今系列の継起的時間そのものの構成的契機をなすものでしかなく、従って時間的境域から超時間的なるものへの超出の此の試みも、可滅的偶然的な個々の「現在の今」から恒常不変的に止まれる今としての「現在性一般」への超出、即ち連続的継起的な今系列の時間内部に於ける超出ならぬ超出でしかなく、かくては又それも現在性一般の地平そのものの前提的な肯定は認として、あり来って現在している諸存在者の本質の何かを、その現在の姿・形の儘に於いて肯定は認し、只単にその本質的諸様相の如何にあるかを考察する、主知主義的エッセンチアリズムへと導びいてゆくものであると云うことが出来よう。かくして此処に存在するもの全体の究極的な存在原因を求めて、永遠的なものへの超越を試みる存在論的探究は、「現在の今」の視圈に於いてその都度何かかとして現前する諸存在者の、個別的偶然的な諸徴表（メルクマール 雑多な直観的諸表象）を、「現在性一般」の視圈に於いて捉えられる普遍的な本質的形相に同化し内面化し、之に還元し、かくすることによって存在するものを存在するものとして、そのあり来って現在する恒常不変的な形相の本質性に関して之を確定は認し、受容的に之を反省思惟する同一性論的認識の体系的全体を求めて遂行せられることとなるであろう。それと共に又同一律矛盾律を根幹とする反省思惟的悟性論理が、かかる現在性一般の視圈そのものを構成する存在の論理として登場し、かくて存在するものの全体を、そのあり来って現在する恒常不変的な自己同一の本質性に関して反省思惟する存在論的探究（主知主義的エッセンチアリズム）の為の、最高の方法論的根拠として、不動の地位を確定するに至った根本的理由をも同時にそこに見ることが出来るであろう。哲学は今や *Onto-Logik* となる。アリストテレスからヘーゲルに至るまでのヨーロッパ伝統哲学の、存在論的根本性格はかかるものとして特

徴づけられるであろう。

存在するものが存在するものとして、その至純なる存在一般に関して決定づけられつつ発現生起する境域は、本来過去—現在—未来へと亘って連続的に継起する生成的發展時間（陽遁的時間）と、之に対して絶対否定的に未来—現在—過去へと非連続的断絶的に還帰する衰滅的腐朽時間（陰遁的時間）との、交互転入媒介的な相補的全体としての根源的時間、云わば永遠回帰的時間の探究の中に求められるべきであった。然るに若しも、就中アリストテレス形而上学に於ける四原因その他の探究に於いて見る如く、根源的時間の両構成契機のうちその一方、即ち過去—現在—未来へと亘って連続的に発現生起する今系列の継起的時間のみを以て、直ちに根源的時間、即ち存在するものが存在するものとして、そこに於いて具体的現実的に発現生起し得る存在一般の地平と看做すならば、そこに形相一元論ともいふべき主知主義的エッセンチアリズムの成立し来ることは蓋し当然であると云わなければならぬ。変転極りなき歴史的時間境域に於いて現在する存在するものの全体を、その至純なる存在一般に関して之を基礎づけるべく、存在するものの全体を越え、時間境域の全体を越えて問わなければならない哲学は、今や単に連続的継起時間そのものの内部に於ける、その都度の個別的偶然的な「現在の今」から、恒常不變的な自己同一性に於いて止まる「現在性一般」への超出を以て足れりとし、然してかかる似而非なる超越、即ち反省思惟的認識行為そのものを、「思惟の思惟」とか「真理の為の真理の追求」等という、自己陶醉的な主体的誠実性に訴えることによって正当化し義証しようとする。我々は然し決してかかる美名に偽瞞されることなく、それ自身依然として歴史的時間境域にあって個体的実存的な、主知主義的エッセンチアリズムの超越的な認識行為がそれ自身の権能を保證するものは一体何であり、又如何にしてかかる立場が正当化され義証され得るかを敢え

て問わなければならない。事実、現在性一般の視圈に定位し、反省思维的悟性認識に立脚する主知主義的エッセンチアリズムによって特徴づけられる、伝統的ヨーロッパ形而上学の持つ抽象的一面性は、歴史的時間境域に於いてその都度現在する諸存在者を、その代替性のない唯一的個別的な運命的存在性格に関して決定づける実存的存在原因の考察に当って、常に自らの無力性を遺憾なく暴露して来たのである。

存在するもの全体の究極的な存在根拠を求めて超越的に思索することは、抑々歴史的時間境域にあってその都度個体的実存的に現存する諸存在者、就中かく思索する我々人間の実存そのものを、その何処からと何処へという、運命的実存的な存在過程の只中に於いて具体的現実的に確定し、代替性なき唯一的個体的実存性に関して決定づけることによって之を基礎付け、義証することにあつたということが出来る。従つてそれは単に、現在性一般の地平に於いてその都度現在する諸存在者の本質の何かを、既在的に現存する恒常不変的自己同一的な何ものかとして予め肯定是認し、只その本質的な諸様相の如何にあるかを帰納と演繹とによつて究明し、かくて「現在の今」に於いて直観される雑多な諸現象を之に包括し秩序づけることによつて此処に、存在するものの全体に普遍的な理拠を与えると云つた、同一性論的な反省認識（主知主義的エッセンチアリズム）を以て足れりとするものでは決してない。飽迄もそれは、存在するものを存在するものとして、その至純なる存在一般に於いて之を基礎付け、義証することを目指すものとして、個体的実存的に現在する諸存在者を、その代替性のない唯一的個体的実存性に関して決定づけ得る様な実存的な存在原因と、従つて又、過去—現在—未来へと亘つて偶発的に発現生起すると共に又衰滅腐朽する諸存在者の、運命的実存的な個体の現存そのことを、凡ゆる時間的制約を超越して必然性を以て予見洞察し得る、実存的予断認識（実存的出会ひの論理）が目指されなければならないであ

ろ。之に対して存在するものを只あるが儘の現在の姿・形の儘に於いて（恒常不変的なものとして）絶對的に肯定は認するところには、如何なる時間的生起も歴史的運命も認められ得ず、従って又一回限りのもの個体的実存的なるものは、可滅的偶然的なるものとしてそれ自体に於いて何等の存在意味をも持ち得るものではなく、一切は只就中天体の整然たる運行に於いてみる如く、ありとしあらゆる存在者は常に同一なるものの永遠的な繰り返しとして、恒常不変的な自己同一性を以て止まる普遍的な諸形相と、従って又唯一的自同的な因果系列とのみが、永遠の相下に觀想され得ることとなるであろう。アリストテレス形而上学は実にかかる立場を体系的に基礎付け正当化しようとしたものであると云うことが出来る。然し之が真の意味での時間の超越としての永遠的立場であり得なかつたことに關しては既に言及した。即ちそこでは、ギリシア黎明期の思索者達を哲学することへと駆り立てた、運命的実存的な個体の現存そのことの究極的な存在根拠を問う真正なる存在問題が、全く回避されてしまっているのである。

存在するものの全体を越えてその究極的な存在根拠を問う往相的超越的な哲学的思索の道は、逆に究極的な存在根拠そのものからその都度の「現在の今」に於ける個別的諸存在者を、その代替性のない運命的実存性に關して決定づけることによつて之を基礎付け正当化し得る、還相回帰的な実存決定的認識を、自らの最終目標として当然予想し前提するものでなければならぬ。果無く東の間のものとして流れ去り流れ来り、その何ものであるかに関して常に不確定的である諸存在者の個体的実存的な現存そのことを、唯一的にして代替性のないその個体的実存性に関して決定し得る如き超時間的永遠的な存在認識、即ち過去—現在—未来に亘る全時間的過程を、恰もその都度の「現在の今」に於いて完結し終焉してしまっているかの如くに之を、云わば永遠的現在の最高頂

点に立って同時に観照し得、かくて又過去・現在・未来の全時間的境域に於いてその都度偶発的に生起し衰滅する諸存在者の個体的な現存そのことを、凡ゆる時間的制約を越えて現在の予見洞察し得る如き実存的存在認識が、往相的超越的な哲学的思索そのことの根本的要求として目指されていなければならないし、又實際常に目指されて来たということが出来る。往相的超越的な哲学的思索行為がそれ自身に何等の自己目的性があるのでもなければ、又かかる行為が既にその往相性の儘に於いて直ちに神聖であるのでも高貴であるのでもない。往相的超越的な哲学的思索行為 (Transzendenz) それ自身の持つ真理性は、只絶対的存在根拠そのものからする還相回帰的 (Reszendenz) な実存的存在認識の持つ真理性、即ち超時間的・永遠的現在の最高頂点からする運命的実存的な存在予断認識の現実的可能性によつてのみ、最終的に弁証され正当化されなければならない。同時に又我々はその間に、存在するものを存在するものとして、その至純なる存在一般に関して決定づけつつ可能ならしめる、現在性一般としての時間を、その根源的な存在原因的機能性に即して具体的現実的に把握するという、哲学の終局的目標への到達の本来的なあり姿を見ることが出来るであろう。

然るに若しも一切の存在するものを越え、時間境域の全体を越えて、存在するものの窮極的な存在根拠を問う往相的超越的な哲学的思索の道が、その抑々の始めから「現在の今」の地平に於いて遭遇する個体的な諸存在者への立ち帰りの道を全く遮断し、唯一的にして代替性のない存在するものの個体的実存的存在そのことを、可滅的偶然性の故を以て如何なる学の対象ともなり得ない残滓的なもの、取るに足らぬ存在の屑として否認し、敢えて之を哲学的考察から除外し抹殺することによつて、此処に全く存在するものの個体的実存認識 (唯一的偶然的な出会ひの認識) を放棄するとするならば、かかる思索こそ却つて逆に (本来の存在論的考察に照らしてみ

る時)、最も抽象的周辺のな試みであると云わなければならない。存在するものをその唯一的にして代替性のない個体的実存性に関して、何等具体的現実的に基礎付け得ないかかる反省的な哲学的思索行為それ自身を、自己目的的にして無制約的な理性の必然的欲求から発する神的活動と解して、之を絶対化し神聖化してみても、かかる反省的観想行為それ自身が、常に歴史的時間境域に於けるその都度の「現在の今」に於いてのみ現実的に可能であることを以てみれば、かかる観想行為をも含めて存在するものの全体は、その存在すること一般に関して抑何であるのかという課題は、依然として何等の解答をも得ることなく、否全然問われもしなかつた無気味な問いとして残存しているであろう。

3

如何なる時間的変化の中にも決して個別的なるもの、偶然的なるもの、一回限りのものを見ることなく、常にそこに超時間的にして恒常不変的なるアイデアと、従つて又コスモスの普遍的なロゴスとを見出すギリシア的思索は、只凡ゆる個別的なるもの、偶然的なるものに関わる歴史的時間境域の全体を、一挙に超出し無視することの出来る現在性一般の視圈に立つことによつて始めて可能なることであつた。我々は之を典型的にギリシア的哲学的な神話、即ち救済への如何なる希望をも抱くことなく、永遠に亘つて苦悩の巨岩を無限なる天頂を目指して押し上げてゆくシジプオスの神話の中に、最もよくその原型を見出すことが出来るであろう。之に対してかかる超時間的永遠回帰的な世界観とは全く対蹇的な、世界の創造とその終末とを確信し、然して又神の意志を告知し、

神にとって既に判然りと見透されている歴史的未来を警告的に予言する予言者達を産み出したユダヤ的思考にあって、歴史的時間境域に於いてその都度一回限りのものとして発現生起し、有限的可滅的なものとして衰滅腐朽し去ってゆく個体的なるもの、偶然的なるものは、何としても無視し否定することの出来ない運命的実存的な現実であり、そこに個体的なるもの一回限りのものの可滅的根拠に深く沈潜することによって、永遠的な救済への超出が信仰的に試みられたと考えることが出来るであろう。それ故ユダヤ的思考にとって歴史上最も本来的な出来事は、個体的なるもの一回限りのものの救済の出来事であって、従って又シジプオスの神話によって示される往相的超越的な思索行為も、然しそれが常に歴史的時間境域に於ける個体的実存的な行為としてのみ現実的に可能である限り、それ自身歴史的時間の世界への絶えざる逆転という、挫折すべく定められた絶望的行為の悪無限的な繰返しでしかなく、此処にかかる有限的な超越的思索活動そのものを、その全き永遠的超越性に関して救済すべく、時間的歴史境域の全体を超えて、時間をその終末的な根源から、既に現在的なるものとして余すところなく生起し終え、現実的に完成されたるものとして一挙に先取し得る様な時間の把握が要求せられ、然してそれは、十字架に懸けられたるものとしての神の子キリストへの信仰によってその達成が試みられたのである。今や時間は先取された終末から満ち来り熟し来ることとなり、歴史的時間境域に於いてその都度現在する存在者の全体は、その代替性のない唯一的個体的な実存的な存在性格に関して自己完結的に決定づけられ、救済され得るものとして思惟されるに至ったと云えよう。

個体的なるもの一回限りのものの実存的救済に関わる此のユダヤ的な決定論的思索は、超時間的非歴史的な現在性一般の視圈に立つことによつて、一挙に宇宙の普遍的ロゴスへの観想思惟的な超越を試みようとするギリシ

ア的な哲学的思索行為を、それ自身歴史的時間境域に於ける個体的実存的なる出来事、即ち有限的挫折的な絶望的行為と看做して、却って此の有限的な超越的思索行為そのものの持つ、唯一的にして代替性のない個体的な実存を、永遠的な終極目的（一神論的ヘブライズム）によって基礎付け義証しようとしたのである。我々は之をアテナイからローマへと激変する歴史的変革期に際して、従来のポリスを中心とする公共生活を放逐せられて、自らの依拠し依存するところを見失った人々に対して、ヘレニズムの哲学が何等の精神的支柱ともなり得ず、新プラトン派の観想的神秘主義を経て、遂にキリスト教的ヘブライズムへとその主導権を譲り渡して行った過程の中に、最も明らさまに看取することが出来るであろう。往相的超越的な哲学的思索行為そのものを、還相回帰的に、自ら個体的実存の真理へと立ち帰ることによって弁証し、基礎付け得なかったギリシア哲学（主知主義的エッセンチアリズムの哲学）は、専ら唯一的にして代替性のない個体的実存の救済という、還相回帰的な真理をのみ追求するキリスト教的ヘブライズムの神学に、今や全く服属することとなる。爾後哲学は、キリスト教護教哲学という徹底的な従属的關係に於いてのみ自らを正当化し義証しつつ、その歴史を展開してゆくこととなる。

十一世紀にカトリック教会が、地上的現実的な權威を有するものとして確立されて以来、此の超地上的な權威による地上の現実的な支配を如何に理論づけるべきかという課題が、グノシスとピステイスの対立をめぐる論争を経て、纏て異教的ヘレニズム文化とヘブライズムのキリスト教文化との総合として企図され、然してそれは十三世紀にトマスによって、アリストテレス哲学のキリスト教化として一応の達成をみることになった。

理性を信仰の犠牲に供せんが為には、当時理性は地上に於いて余りにも強大な力を持っていた。理性と信仰とは夫々孤立させることも出来ないし、さればと云って両者を全く混同し同一化することも許されず、飽くまでも

両者を区別し乍ら然も統一しなければならなかった。東方アラビア的アリストテリズムとの接触によって生じた信仰と理性、啓示的真理と論証的真理、超自然と自然との対立の問題は、先ず異教的ギリシア哲学を全面的に排除することによって、キリスト教的信仰の純粹性を確保しようとしたラテン教父達の、「不合理なるが故に我れ信ぜず」(credo quia absurdum est) という立場から一転して、「先ず信じ然して知らん」(credo ut intelligam) という、キリスト教的世界観の確立をプラトニズムを媒介することによって図ろうとしたアウグスチヌスの立場を経て、遂に、東方アリストテリズム、就中アヴェロイストとの対決に迫られてアリストテリズムを援用する、トマスの「先ず知り然して信ぜん」(intelligo ut credam) という智と信との全き綜合、即ち「アリストテレスの哲学とアウグスチヌスの神学とを統一して、より高い所に信仰と理性とを調和」しようとする立場に達し、かくて此処にギリシア哲学のキリスト教化という積極的な企画によって、爾後今日に至るまで何等かの形に於いてヨーロッパ哲学の全歴史を支配し続けている、一つの規範的な解決に到達することになったのである。

トマスによれば信仰も理性も共に真理の問題であり、信仰によって救霊に必要な神よりの啓示が超自然的真理として恩寵の光の下に受容せられ得るのに対して、理性は自然的光の下に自らの論証と推理とを以て、神の設定した存在の諸法則を自然的真理として獲得し得るが故に、信仰も理性も共に真理の唯一の源泉たる神に由来するものであり、従って両者の間に何等の矛盾のあるべき筈はなく、両者は夫々唯一的真理の二様相として、根源的に統一せられ得べきである。然し両者を統一すると云っても、一切の神学的啓示的真理をその儘直ちに哲学的論証的真理を以て代置することは、一神論的超越的なキリスト教神学の立場からしては何としても許され得ない故、飽迄も両者は絶対的に区別され乍ら然も統一されなければならぬ。「啓示されたもの」(revelata) に対す

る「啓示可能のもの」(Revelabilia) という神学的形而上学的仮設に関するトマスの苦心は実に此処にあったという事が出来よう。神学本来の超自然的真理と、哲学本来の自然的論証的真理とを、共に真理の唯一の源泉たる神に由来するものとして、両者を決定的に結びつける媒介者、即ち啓示に内含され、然も尚ほ哲学によって自然的真理として論証され得る形而上学的対象としてトマスは、「啓示可能のもの」を想定して、之に神の存在、靈魂の不滅等を内含させ、かくて所謂神の存在証明に対する人間理性の自律的な哲学的論証可能の権利を認めることによつて、「知りて然して信ぜん」という、智(アリストテレス哲学)と信(アウグスチヌス神学)との根源的な綜合を達成しようとしたのである。哲学は此処に「啓示可能のもの」、即ち神の存在や靈魂の不滅等を、理性の自然的光の下に論証的に推理する反省的思惟の遂行の中に、自らの現実的な存立そのことを正当化 *justificatio* せしめられ、従つて又同時に、自然的理性(反省的思惟)の自己目的的自己完結的な自律性と、地上的世界に対するその無制約的な遂行可能の権能とを与えられたということが出来る。

世界を超越する神の啓示的真理、即ち信仰的教理を前提するキリスト教的啓示神学は、世界を対象とする哲学、即ち自然的理性の論証力のみに基づいて構成され得るギリシア的存在論(自然神学)に対して、その眞理性を基礎づけ義証ニステイファイカチオすることによつて、自らの絶対的眞理性を確証し得たのである。然しこのことは又逆に言えば、自然的理性に基づくギリシア的超越的な哲学的思索は、存在するもの全体の究極的存在原因を、その還相回帰的な原因性に関して(個体的なるものの実存的な存在決定即ち救済に関して)積極的に思索することから全く自らを疎外し、只管に、既在的に現在する世界内在的な諸存在者の全体を、被造的なるものとして、その自己閉鎖的自己完結的な本質実体の自己同一性に関して肯定是認し、神的理性が生成の目的像として設計した本質エッセンスによつて

普ねく規定され、目的階層的に秩序づけられ体系づけられた不変不動の形相一元的世界を、对象的に反省思惟する内在的範圍に自らを限定すると共に、哲学的思索活動を専ら、思惟と本質と実存との全き同一が承認され得る現在性一般の地平に於いて、始めてその論証と推理とを存在論的に現実的たらしめ得る悟性的な反省思惟活動に限局し、かくて此処に哲学即主知主義的エッセンチアリズムという、ヨーロッパ哲学不拔の伝統を確定し、根拠づけることになったのである。ギリシア哲学は只自らを専ら主知主義的エッセンチアリズムとして限定することによつてのみ、キリスト教神学に於いて義証せられ、かくて又キリスト教化せられ得たということが出来るであらう。

然し以上の試みは之を存在論的に見る時、只永遠回帰的な根源的時間の地平に於いてのみ、具体的現実的に成立し得たギリシア黎明期に於ける超越的な哲学的思索を、現在性一般の地平に於いてのみ成立し得るアリストテレス的形而上学を媒介することによつて、ユダヤ的な歴史的時空境域の中へと引き移し、そこに於いて然も尚ほ哲学的思索そのことの現実的可能性が、その無制約的な自己目的性に於いて正当化され基礎付けられ得たということに、我々は最も重要な意味を認めなければならないであらう。

今や然し超地上的なる神の国が地上的世界を包摂し、地上に於いて神の国を実現することの現実的可能性を、論証と推理とを以てする自然的理性の、無制約的な遂行そのことの中に追求してゆこうとするスコラ哲学の此の体系化的努力のうちにあつて、自然的理性は却つて自らを、地上的世界のかかる体系的把握の為の現実的可能性根拠たる自らの自律的な力を、次第に神学的權威から離れて自覚してゆくこととなる。近世は正に歴史的時空境域に於いて現実的に達成された、理性の自律という、スコラ哲学の帰結から出発する。神の存在や靈魂の不死等所

謂「啓示可能のもの」を、積極的に論証し推理し得る能力と権能とを賦与せられることによって自然的理性は、自らの此の自己目的的にして無制約的な認識の遂行そのことを、今や自己自らによって正当化し義証しつつ、轉て神学体系から自らを全く切り離して地上的理性として自立し、人間的理性による地上の世界の無制約的な体系的把握を目指す主体的意志の形而上学として自らを完成する途上に於いて、我々は、中世スコラ哲学から近代的形而上学への極めて鮮かな転回を見ることが出来るであろう。ベーコンの「知は力なり」という確信に満ちた自覚や、デカルトのエゴ・コギトの発見や、ケプレルやガリレイによって胎動し、ニュートンに至って古典的完成を見る近代自然科学の成立過程等の中に、真理は超越者からの啓示によるものでも、又權威ある伝統的諸教理によるものでもなくて、只我々人間の、論証推理的な理性的認識の遂行そのことの中に於いてのみ獲得され得るといふ、新しい真理発見の可能なる道が切り開かれて来る。(未完) (昭三三・五・十一)